

Title	再読 『マライ・ポリネシア諸語』 : 内容的類型学の立場から
Author(s)	山口, 巖
Citation	Dynamis : ことばと文化 (1997), 1: 1-14
Issue Date	1997-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/87631
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

再読『マライ・ポリネシア諸語』

—内容的類型学の立場から—

山口 巖

はじめに

故泉井久之助博士の『マライ・ポリネシア諸語』¹が一冊に纏められて弘文堂から出版されたのは、1975年のことであった。博士は私の恩師であり、親しくその警咳に接した学生時代はもとより、研究者の道に入ってから、学恩に浴すること既に久しい。先生の教えを受けたものには、言語に対する考え方、言語理論等の外、先生の御専門の一つであったラテン語に関するものがあつた。しかしもう一つの御専門ともいべきマライ・ポリネシア諸語については、先生は、この語族の下位分類として、それ以前にも唱えられていたポリネシア語派、インドネシア語派、メラネシア語派という分類に対して、はじめて明確な音韻的、形態的クリテリアを提示し、これに基づいてミクロネシア諸語といわれるものは上述の3語派に属する5タイプの言語が蟄集しているに過ぎないことを示されたといわれる。筆者はその令名については夙に承知していたものの、浅はかにも自分の専門とは遠いと考えていたために、この書物についても、出版された折りに読みはしたが、それは師に対する敬意から出たものであつて、文字どおり一読したにとどまっていた。極く最近になって所謂「内容的類型学」が興ったこととの関連に於いて、この書物をもう一度読んでみようと考えたのが、この小文の趣旨である。

§1 内容的類型学という観点から本書を読み直してみれば、最も興味のあるのはメラネシア語派及びポリネシア語派に属する諸言語であると思われる。インドネシア語派が形態の面で著しく簡単化されたのに対し、この語派のみは未だ古形を比較的良好に保存していると思われるからである。最もどちらがより古い形であるかは文献資料によって遡ることができない場合には、必ずしも分明ではない。メラネシア型の組織を古形と考えられることができるのは、偏に内容的類型学の基準に基づくからであつて、これが未だ知られていない段階にあつては、これを決定するのは無理であつたらう。著者もメラネシア型の組織を後期の発達と考えていた節もあり、

¹泉井久之助著、『マライ・ポリネシア諸語 —比較と系統—』、弘文堂、昭和50年7月10日第1刷発行。

またインドネシア語派に所属するマライ語の所有代名詞接尾辞に触れて、これが複数の1人称と2人称を欠き、独立の人称代名詞を後置する形を取っていることに関して、「現代のマライ語は、このように所有接尾辞が単複の人称のすべてにわたって一貫的に完備しないけれども、これはマライ語が元の体系を第二次的に単純化したからである」([6, p.29])と述べて、先とは逆の方向を示唆している節もある。

マライ語、ジャワ語²の文法は概して簡単である。そこには名詞・代名詞に性と格と数による形の屈折もなく、動詞に人称・時称による形の変移もない。いわゆる仄用(declension)と活用(conjugation)とは、これを欠くけれども、ただ接辞の働きは活潑であって、時に一つの基語に対して二つまたは三つの接辞が連合して用いられる共接辞・連接辞の現象もある。しかしそれらの働きは、むしろ語詞や品詞の派生または意義のニュアンスの分化に関する語彙的なものが多く、厳密に文法的な機能を持つものは比較的少ない。……

これに反してメラネシア語派、ポリネシア語派の諸言語には、簡単ながら一般に、明瞭な文法体系の発達が見出される。その体系の構成は必ずしも名詞、あるいは動詞自体の変容によるものばかりではない。同時にまた、少なくとも一定の小辞を用いて一定の格形にかえ、あるいは一定の小辞を駆使して一定の活用範疇にかえる。cf. [6, pp.64-65.]

著者はこの語族に共通して認められる所有代名詞接辞について述べ、インドネシア語派ではこれが名詞の種類を問わずに汎用的に用いられるとして、この派に属するチャモロ語とパラオ語について、次のように例示している([6, p.30.])。

チャモロ語		パラオ語	
(単)	(複)	(単)	(複)
1. -ho, -ko	{ -ta (包) -māmi (排)	1. -(e)k	{ -(e)d, -(e)δ (包) -am (排)
2. -mu	-mizu	2. -(e)m	-iu
3. -n'a[-ña]	-n'tha, -ñiha	3. -(e)l	-ir

ここで注目すべきは、1人称複数において「包括形」と「排除形」が区別されていることである。これが活格言語の包含事象である inclusive と exclusive の別に外ならないからである。

§2 ところが、メラネシア語派の諸言語では、この所有接尾辞が名詞によってその使用を異にすることを、著者は指摘している([6, pp.31-32])。少し長いが重要なので引用すれば、

²共にインドネシア語派に属する。

ところがメラネシア語派に属するトラック語では、この文法的手続きの適用に、限定と選択がある。この言語において、

接尾的所有代名詞として、

- | | | | | | | |
|-----|----|------------------------------------|----|------------------|----|------------------|
| (単) | 1. | - <i>(e)i</i> | 2. | - <i>om, -am</i> | 3. | - <i>an, -en</i> |
| (複) | 1. | - <i>ats</i> '(包), - <i>em</i> (排) | 2. | - <i>emi</i> | 3. | - <i>er</i> |

の形が用いられるのは、その名詞の示す事象に対する所有関係が、自然的、生得的、または情緒的に非常に緊切であって、一種の異身同体的なものが感じられる場合に限られる。身体部位、賦性、性状、親族関係、または名のりのような、その人と切り離して考えられないもの、あるいはその所有の関係を猥りに処理する自由のないものである。(そこにはいわゆる *inalienability* あるいは *uncontrollability* がある)。例えば *sam^a-ei*《私の父》、*pot-i*《私の鼻》、*neu-i*《私の声》、*im^a-ei*《私の家》、*tamatam-am*《汝の性質》、*it-an*《彼の名》、*it-om*《君の名》、*wā-ei*《私のカヌー》など。

関係が緊切なために、これらの名詞は常に所有接辞とともに用いられ、単独形の抽出が言主自身にとっても時に困難なことがある。《目》を示す名詞は常に《私の目》(*mes-ei*)、《汝の目》(*mes-am*)等としてのみ用いられるために、単独の《目》(*mās, mas*)を引き出すことは、現地における私の被問者たちにも若干の困難があった。

それではこの限定の範囲以外の名詞について、その所有関係はどうしてあらわされるか。たとえばトラック語に *kön*《歌》という語がある。この歌に私のことが歌い込まれているならば、私と歌との関係は分かつことができない本質的なものになる。このとき、《私の歌》は上のように *kön-ei* である。けれども一定の歌を歌うことは誰にも許される。私が歌う歌としての《私の歌》は、その所有的關係は一時的であって、むしろ所管的とすべきものである。このときは上の本質的な様式を使うことができない。必ず *aik ön* として、*kön-ei* とは区別される。この一時的・所管的としての所有関係は、接尾辞によらず、むしろ独立的な所有代名詞を前置してあらわされる。—その形は、トラック語において

- | | | | | | | |
|-----|----|--------------------------------|----|------------|----|-----------|
| (単) | 1. | <i>ai</i> | 2. | <i>om</i> | 3. | <i>an</i> |
| (複) | 1. | <i>ats</i> '(包), <i>am</i> (排) | 2. | <i>ami</i> | 3. | <i>ar</i> |

したがって *ai rauses*《私のズボン》も私が自由にしうる所管下のズボンを意味し、必ずしも今、私がそれをはいっている必要はない。*ai aqan*《私の仕事》も私の所管の業務をいうのであって、現にそれに従事していなくても構わない。習慣的にこの種の関係に置かれるものを示す名詞は、常にこの種の方法によってその所属関係が表現される。私のバナナといっても私との関係は本質的なものではない。単に所管または保管の關係に

すぎない。バナナは生食するものであるから、このときは生の食物を示す分類詞 *ots'* を用いて、*ots'-ei üts'* とする。煮て食べる *mai*《パンの実 (*artocarpus*)》については、煮た食物を示す分類詞 *en* を用いて、同様に *en-ei mai* 《私のパンの実》とされる。

§3 明らかなように、ここで指摘されているのはクリモフのいう非分離所有 *organic possession* と分離所有 *inorganic possession* の区別である (cf. [2, pp.136-137.], [3, p.49.], [9, p.101. & seq.])。そしてこれは広大な領域に分布するメラネシア諸語の到るところで観察されるとする。

内容的類型学の発展によって初めてその本質が知られるようになってきたこの区別も、流石に著者の鋭い目を逃れ得てはいない。かえってなまじ内容的類型学の枠組みを知っていれば、ここにその図式に当てはまるものを見いだしたことのみに満足して、その形式の内容、生きた「はたらき」を見逃す恐れなしとしない。戒心すべきことではある。

なお、著者は分離所有のばあいには、しばしば所有接辞が分類詞に後接した形で非修飾語の前に置かれることを指摘している。これはジュリンスカヤもメラネシア諸語に属するモトゥ語について報告しているが ([1])、著者のものは昭和 13 年 (1938 年) にトラック島を訪れてから翌昭和 14 年 (1939 年) および昭和 16 年 (1941 年) の 10 月、まさに太平洋戦争の勃発する 2ヶ月前に帰着する最後の調査迄、兩三度にわたって内南洋の調査を行った結果であって、少なく見積もっても 30 有余年ジュリンスカヤに先だっている (cf. [9, pp.101-103])。とまれ、この分類詞は、多分類言語の包含事象であると考えられていることを指摘しておくにとどめる。

§4 著者はインドネシア語派のチャモロ語の人称代名詞を表のように示している ([6, p.70.])。著者はこれに基づいて実に詳細なチャモロ語の「活用表」を作って示しているが、この表を一見すれば、直ちに興味を惹く点が見いだされる。

その一つは、動詞の主語を表すのに 2 系列の接辞が存在するということであり、第二には、自動詞的主語が接尾辞によって表されるのに対して、他動詞的主語は、接頭辞の位置を占めることである。第一の点は、これが活格言語並びに能格言語にみられる特徴であることから、これらの言語がそのいずれかの類型に属する蓋然性の高いことを示していると思われる。第二の点に関しては、クリモフがイベリア・コーカサス語族に所属する能格型言語であるアプハズ語等に関連して、能格言語に共通す

	a) 独立的	b) 所有 接尾辞	c) 自動詞的 主語 (接尾)	d) 他動詞的 主語 (接頭)
(単)	1. <i>g^u aho</i>	-ho, -ko	-o, -zo	hu-
	2. <i>hago</i>	-mu	-hau	un-
	3. <i>g^w iza</i>	-n'a	(-g ^w i)	ha-, u-
(複)	1. (包) <i>hita</i>	-ta	-hed(-hit)	ta-
	(排) <i>hami</i>	-(n)mami	-ham	in-
	2. <i>hamzu</i>	-(n)mizu	-hamzu	en-
	3. <i>siha</i>	-(n)n'īha	(-siha, -sia)	ha-, u-

る特徴として、意味上の目的語を表す接辞と、意味上の主語を表す接辞が、同時に動詞に付加される場合、前者が後者よりも前に来る傾向があり、ダルギン語のように接頭辞と接尾辞の両方を用いる言語では、ふつう目的語を表す指標が接頭辞として、また主語を表すものが接尾辞として現れる傾向のあることを指摘しているが、チャモロ語のばあいにはまさにこれと符節を合しているかに見える ([2, pp.102-103], [9, p.60])。

§5 しかしこの表に附された著者の説明と、実際に挙げられた動詞 *nāi*(与える)の「活用表」を突き合わせてみれば、事態はさほど単純なものではないことが判ってくる。先ずは著者の説明を聞こう ([6, pp.70-71.])。

この4種の代名詞はそれぞれ動詞の活用体系とも深い関係を持っている。動詞《与える》を意味する *nāi* の「完了」の場合を例にとれば、

(a) の独立形は *nāi* が接中辞-*um*-を取る形 (*n-um-āi*) とともにあらわれる。たとえば *g^u aho n-um-āi* 《私(こそ)が(それを)与えた》、……このとき独立形 *g^u aho*《私》が用いられるために、詳しくは、《与えたのは私だ》という意味にもなって、行為の主語が焦点におかれて特に強調される。(フランス語でいえば=*moi, je l'ai donné*)。しかし今、ここに(c)が用いられることも多い。

(d) の形は、反対に主語よりも行為の対象(与えられたもの)に焦点があるときに用いられ、このとき動詞の完了の形は基語 *nāi* のままである。すなわち *hu-nāi* となる。《私は(例のそれを)与えた》

…。

動詞の受動形は、ひろくマライ=ポリネシア諸語に見出されるように接中辞-*in*-を用

	接頭辞系列	接中辞	接尾辞系列	備 考
1.	(a)	-um- (-um-	(c)	主語焦点形)
2.	(d)	-ø-		目的語焦点形
3.		-in-	(c)	定受動
4.	ma-	-ø-	(c)	不定受動
5.		-in-	(b)	主体受動
6.	ma-	-ø-	(b)	客体受動

いて造られる (*n-in-āi*)。この形の時には、代名詞 (c) の形を用いて、*nināi-zo* としなくてはならない…。意味は《私は与えられた》。または《私に (それが) 与えられた》、すなわち《私は (それを) 得た》ことを示し、中動的であって、詳しくは、与えられた「こと」を重視しながらも、明瞭に特定の人によって、与える行為が私になされたことを含意する。漠然と非人称的または一般の人々によってその行為が私に行われたことを含意するときは、接頭辞 *ma-* を動詞 *nāi* につけて *ma-nāi zo* とする。代名詞はやはり (c) の系列の形である…。

これに対して代名詞 (b) の形 (所有代名接尾辞の形) が受動相動詞とともにあらわれるのは、(仮に α 欄に限って言えば)、ともに受動行為の客体を重視しつつ、その行為が、代名詞によって示される主語から起るか、主語に向かうかを示す場合である。すなわち動詞が接中辞 *-in-* による形を取って *nināi-ho* となる前者のとき、《(特定のそれが) 主体的に私によって与えられたこと》を意味する…。同じく *-ho* を取りつつ動詞が *ma-* による *ma-nāi-ho* となる後者のときは…、《特にそれが私に対して与えられた》ことになる。

§6 いまこの説明を整理してみると、上の表のようになると思われる。

接中辞の *-um-* については、著者は次のように解説する ([6, p.54.]。

広くインドネシア諸語にあらわれ、殊にチャモロ語の動詞活用体系に活発に働く…。能動形の構成要素。— チャモロ語では単なる動詞化要素としても働き、*cinina* 《下衣》に対して *um-inina* 《下衣を着る》のような形もあらわれる。動詞に接中されて動詞の意味を強調し、自然、確言的となって、完了性を持つことも多い。

§7 また接中辞 *-in-* については、次のように述べられている ([6, p.55.]。

広くあらわれる受動形構成要素。チャモロ語動詞の活用体系において受動形の構成に活発に参与し……上の *-um-* との対照は次の例において明瞭にあらわれる。たとえば、

ダヤク語 *k-um-an* 《食べる》、*k-in-an* 《食べられる》(ともに語根 **kan*)。古期ジャワ語 *ton* 《見る》、*t-in-on* 《見られる》。

明らかのように、著者はこれによって、*-um-* の構成にかかる能動形と *-in-* による受動形という相の対立を考えていたと思われる。他動と自動、能動と受動が言語に通有な普遍的範疇でないとは判明するのが、漸く最近になって内容的類型学とともにもたらされた考えであることを思えば、著者の考えはまことに無理からぬことといえる。ただ最近の知見をもとにしてみれば、上述のダヤク語の例のように、「本来」他動詞であったはずの **kan* が、なぜ「他動」性を付与する接中辞 *-mu-* を取らねばならなかったのか、疑問を残すことになろう。むしろ古期ジャワ語の *t-in-on* 「見られる」に対する *ton* 「見る」のように、語根を用いることのほうが自然であるように思われる。事実、著者の動詞活用表をみれば、例えば「目的焦点形」にはこの接中辞はなく、また「主語焦点形」にもたとえば未来とされる *g^waho hu nāi* 「私が(それを)与えよう」のように、この接中辞を欠くものがある。

杉田洋は後述するように、接中辞 *-um-* の機能を意味上の目的語が特定であることを示すとしている ([8, p.863.])。

これに対して接中辞 *-in-* は「一般的、または非特定のなものよりの受動」を表すいわゆる「不定受動」および「私のために、私に対して与えられる」ことを意味するいわゆる「客体的受動」を除く、「明確に一定のものから作用を受ける」いわゆる「定受動」と、「私によって、私から与えられる」ことを示す「主体受動」に用いられるとされる。そうすればここには「定・不定」と「能動・受動」の二つの原理が働いているかに見える。しかしその場合にも「不定受動」ならびに「客体的受動」が「受動」であるのにこの接辞を欠くのは何故かを、理解することは難しいであろう。

また5類と6類のばあいにも問題が残る。著者の例によれば、5類の *nināi ho* は、これが接中辞 *-in-* を伴うにもかかわらず、「(特定のそれが)主体的に私によって与えられたこと」を表し、逆に6類の *ma-nāi-ho* はこの接中辞を持たないにもかかわらず、「特にそれが私に対して与えられた」となるとされるからである。ここでは恰かも行為の方向性が逆になっているかに見える。

ここに接頭辞 *ma-* の影響が存在しているか否かについては、4類と6類の比較が有用であろう。両者の異なるところが偏えに(c)類の接辞を取るか、(b)類の接辞を取るかにのみ、存しているからである。6類は既に見たが「私によって、私から与

えられる」ことを意味する「主体的受動」形とされるものである。4類は「漠然と非人称的または一般の人々によってその行為が私になされたことを含意する」とされる「不定受動」形 *ma-nāi zo* である。両者は等しく接辞 *ma-* を備えながら、行為の方向を異にしている。このことから *ma-* の存在が方向性に影響を与えているとはいい難いことが判明する。杉田洋は *ma-* を対象が不特定であることを表すもので、*-um-* と対立する機能を持つとしている ([8, p.863])。

そうとすれば、すくなくともこの形を備えたものが「不定」であることが知られる。

§8 著者はこのように一応は「受動形」を立てながらも、上述の説明にみたように、「この形の時には、代名詞 (c) の形を用いて、*nināi-zo* としなくてはならない…。意味は《私は与えられた》。または《私に(それが)与えられた》、すなわち《私は(それを)得た》ことを示し、中動的であって、詳しくは、与えられた「こと」を重視しながらも、明瞭に特定の人によって、与える行為が私になされたことを含意する」と述べているように、これが真性の受動形ではなく、印欧語的にいえば中動相に近いと述べている。現在活格言語類型には相 *diathesis* の対立として「求心相」と「非求心相」もしくは「遠心相」の対立が存在していることが知られており、その際有標的なものが求心相であることも解っている。そうすれば接中辞 *-in-* は零接中辞の非求心相に対する有標的な求心相を形成し、これと欠如的対立の有標項となるものであることが了解される。著者の留保は実はこのことに関連する内容を持つものではなかったかと思われる。これが当たっているとすれば、炯眼という外はない。

そこで *-in-* を有標的な求心相を表すものであるとする。

このうち a) 類はしばしば b) 類の要素と共に用いられた形が見えることから強調形であり、b) 類が本来の主語を表す接辞であることが知れる。たとえば未来の主語焦点形とされているものには、*g^waho hu fan-nāi* のような形が挙げられている。従って「主語焦点形」というのは、主語が強調された結果、恰かも主語に焦点が当てられたかに感じられるようになったものと考えてもよいであろう。

問題は b) 類と c) 類である。著者は接辞との結合のみを示し、具体的な文例を挙げていないから判断は難しいが、*n-ināi-zo* が「私は与えられた」すなわち「私は得た」というときに (c) 類の接辞と用いられ、接中辞 *-in-* を伴わずに (c) 類の接辞を

- 1) in-をもたないもの。
 - i) a) 類または d) 類の要素を前置するもの
 - a) a) 類を前置するもの — 主語/行為/不定/客体受動焦点形
 - b) d) 類を前置するもの — 目的語焦点形
 - ii) b) 類または c) 類の要素を後置するもの
 - a) b) 類を後置するもの — 客体的受動
 - b) c) 類を後置するもの — 自動詞的活用
- 2) -in をもつもの
 - i) a) 類の要素を前置するもの — 定受動/主体的受動行為焦点形
 - ii) b) 類または c) 類の要素を後置するもの
 - a) b) 類を後置するもの — 主体的受動
 - b) c) 類を後置するもの — 定受動

伴って *ma-nāi-zo* としたときには「特にそれが私に対して与えられた」ことになる (cf. *supra*) とすれば、c) 類の接辞は実は絶対格にたつものを表していたと考えられる。杉田洋も、この系列の接辞が自動詞の主語とも、他動詞の目的語ともなり得ることを指摘している ([8])。そうとすれば *ma- ~ -ø(c)* の形式をもつものと *ma- ~ -ø(b)* の形式をもつものとを等しく「受動」としたのは何故であったろうか。再び内容的類型学の結果を援用すれば、動詞と最も近く、これと第一次のシンタグマを造る要素を指示する接辞は、活格および能格言語類型において意味上の自動詞の主語とも、また意味上の他動詞の目的語ともなり得るということが想起される。すなわち、接頭辞 *ma-* が不定の対象を表すことは既に述べたことであってこれを措くとすれば、この (b) 系列および (c) 系列の接辞が共に意味上の目的語を指示するものである蓋然性が高いのである。これに飽くまで「主語」の位置を与えようとすれば、この形式を「受動」とせねばならなくなる。

著者がこのように無理な説明を強いられたのは、内容的類型学が未だ知られていなかった当時、同じ接辞が意味上の自動詞の主語とも、また意味上の他動詞の目的語ともなることが、知られなかったためであると考えられる。この事情は形式的類型学の歴史の中で、能格言語の意味上の他動詞の構文に関して「他動詞受動態説」が唱えられた経緯と同じであったと考えられる。このことはまた「与える」ことと

「得る」こととが、同じ事態を表していたこと、言い替えればこの言語が活格言語であった可能性を示唆するものでもある。活格および能格言語類型において、動詞は第一次のシンタグマを構成する名詞と一致することが知られていることからすれば、*ma-* と *um-* とが、第一次のシンタグマと一致して「不定性」および「定性」を表すことも、良く理解できるであろう。しかしこのことによっても、(b) 系列と (c) 系列の相違を説明することにならない。

§9 著者が分類の大きな柱としている「焦点」という概念については、杉田洋の、次のような説明がある ([8, p.863])。

チャモロ語の分析には、フィリピン諸語の分析に際して用いられる「焦点」の概念が援用されることが多い。ここでは、トッピングの分析にしたがって「行為者焦点」「目的語焦点」の2つを簡単に解説する。

a) 行為者焦点 他動詞文において、焦点が行為者にある場合、行為者は強調代名詞あるいは名詞として表わされ、他動詞には、目的語が特定の対象を表わすときに接中辞 *-um-*、不特定の対象を表すときに接頭辞 *man-* が付される。

Hu li'e' i palao'an. (焦点なし)

(私-見る-その-女)「私はその女を見た」

Guahu l-um-i'e' i palao'an.[特定目的]

(私 [強調]-焦点-見る-その-女)

「私はその女を見た (のだ)」

Si Juan l-um-i'e' i palao'an.[特定目的]

(冠詞-ファン-焦点-見る-その-女)

「ファンがその女を見た (のだ)」

Si Juan man-li'e' palao'an.[不特定目的]

(冠詞-ファン-焦点-見る-女)

「ファンが女を見た (のだ)」

b) 目的語焦点 目的語に焦点がおかれると、動詞に接中辞 *-in-* が付され、行為者に、それが個人名なら *as*、そうでなければ *ni* が前置される。

I lahi ha li'e' i palao'an.[焦点なし]

(その-男-彼-見る-その-女)

「その男がその女を見た」

L-in-i'e' i palao'an ni lahi.

(焦点-見る-その-女-その〜が-男)

「その女をその男が見た」

L-in-i'e' si Maria as Juan.

(焦点-見る-冠詞-マリア-冠詞 [〜が]-ファン)

「マリアをファンが見た」

接中辞 *-in-* が「目的語焦点形」を表すものとして、この機能が何に由来するものであるかを考えてみると、二様の解釈の可能性があるとと思われる。ひとつはこれが初源的には遠心の相を表すものであって、無標の非遠心相と対立をしていたと見るばあいである。その際にはたとえば上掲の L-in-i'e' i palao'an ni lahi. (焦点-見る-その-女-その〜が-男)「その女をその男が見た」のばあい、「男」が意味上の主語になると解釈される。「男」の「見る」行為が、遠心的に「その女」に及ぶのである。もう一つの可能性は逆にこの接中辞が表すものは「求心」相であって、これが無標の非求心相と対立すると考えるばあいである。このときには「その女」に対して求心的に「男」の「見る」という行為が及ぼされると解釈される。感覚的には後者の解釈が妥当であると思われるが、それだけでなく内容的類型学では「遠心」相が有標になる例は少なくとも現在の所報告されていないという事情もある。この構文が b) 系列の接辞をとるとき、泉井において「中動的」な「受動相」とされ、かつ「*-ho*を取りつつ動詞が *ma-*による *ma-nai-ho*となる後者のときは...、《特にそれが私に対してあたえられた》ことになる」という、一見矛盾したかに見える説明をしているのも、却って事実在即した感覚の表れであったと見ることができる。

§10 さて b) 系列と c) 系列の接辞の機能であるが、著者の説明に限定すれば、c)

系列のものがいわゆる「絶対格」指標である可能性が強い。もしそうとすれば、これは非分離所有の人称接辞と一致することになる。内容的類型学によれば、活格言語類型において、非分離所有の人称接辞として用いられるのは、原則として絶対格の指標であることが知られており、この結果とは矛盾するが、少なくとも杉田の例からすれば、c) 系列の接辞が絶対格の標識として用いられている蓋然性が高いといえるであろう。

b) 系列のばあい、杉田洋はこれが用いられるのは特定の語に限られているとしているが、その内容については、何も述べていない。これが上述したように意味的な自動詞の目的語を示すとすれば、内容的類型学でいうところの情緒系列であるのか

も知れない。杉田が「欲求、好悪などを表わす語は、中間代名詞のかわりに所有代名詞を伴うことが要求され、この点で、他の動詞的な語と大きく異なる」([8, p.859])と指摘しているのは、このことを強く示唆するものといえよう。もしそうとするならば、これが用いられるのが一定の閉ざされた語彙の集合に対してであることと符節を合っすることになる。いずれにもせよ、この点については、泉井のみでなく、杉田、柴田らの説明からも、確たることはいえない。

c) 系列の接辞が意味上の目的語を示す例 (1) および c) 系列の接辞の用いられる例を杉田によって示せば、次の如くである。

- 1) Si Juan ha li'e' yo'.
 (冠詞-ファン-彼-見る-私)
 「ファンは私を見た」(yo は泉井の zo に当たる。)
- 2) Hafa ga'o-mu?
 (なに-より好む-あなたの)
 「あなたは何をもっと好むか」

もう一つ述べておく必要があると思われるのは、分類子の存在である。これは活格言語類型以前の言語類型として想定されている多分類言語類型の包含事象であり、したがって活格言語以後の言語類型にとっては、随件事象である。これが b) 系列の人称接辞を伴って分離所有を表しているのは興味深い。

おわりに

以上『マライ・ポリネシア諸語』を再読してみた。内容類型学以前のものであるために、著者が非常な苦心をしてこれらの言語の現象を説明していることが解る。そして内容類型学の立場からすれば、最も知りたいことがらの記述がかえって閉却されていることも確かである。しかし内容類型学を知らなかったからこそ、単に枠を与えるに過ぎない記述ではなく、生きた具体に即した説明が可能であったのだということも、実感できる。それは著者の深い洞察の賜であるに相違ない。

筆者はもとよりマライ・ポリネシア諸語については、目に一丁字もない者であるから、あるいは誤った判断を下しているかもしれないが、いずれにしても、既に存在している内容的類型学以前の記述について、内容的類型学の立場から読み直すという作業が必要であると思われる。

関係文献

- [1] М. А. Жури́нская, Именные посессивные конструкции и проблема неотторжимой принадлежности, *Категории бытия и обладания в языке*, М., 1977, pp.197-198.
- [2] Г. А. Климов, *Очерк общей теории эргативности*, М., 1973.
- [3] Г. А. Климов, *Типология языков активного строя*, М., 1977.
- [4] Г. А. Климов, *Типологические исследования в СССР (20-40-е годы)*, М., 1981.
- [5] Г. А. Климов, *Принципы контенсивной типологии*, М., 1983.
- [6] 泉井 久之助『マライ・ポリネシア諸語 —比較と系統—』弘文堂、昭和50年7月10日第1刷発行。
- [7] 柴田 紀男「ポリネシア諸語」『言語学大辞典』第二卷、世界言語編（下-1）三省堂、1992年1月、pp.1162-1172.
- [8] 杉田 洋「チャモロ語」『言語学大辞典』第二卷、世界言語編（中）三省堂、1993年11月、pp.857-863.
- [9] 山口 巖『類型学序説』京都大学出版会、1995年10月

Summary

Rereading the Late Prof. Izui's Work: *The Malayo-Polynesian Languages*
— *Their Comparison and Genealogy* —

Iwao YAMAGUCHI

This article aims to reread the late Prof. Izui's book dealing with the comparative study of Malayo-Polynesian languages and their genealogical classification from the viewpoint of contensive typology. This viewpoint has been developed through a long tradition of Russian language studies, G. A. Klimov being one of the tradition's most eminent representatives.

Professor Izui's description of these languages demonstrates his keen insight into language phenomena while also revealing his limitations, limitations that were quite natural given the theoretical resources of his day. The chief good of this rereading, perhaps, consists in the discovery of these very limitations. A new theory always requires revision of existing materials, and this is true of language descriptions. The rereading offered here points out clearly what must be supplemented in Professor Izui's work in order that Malayo-Polynesian languages may be more adequately described.